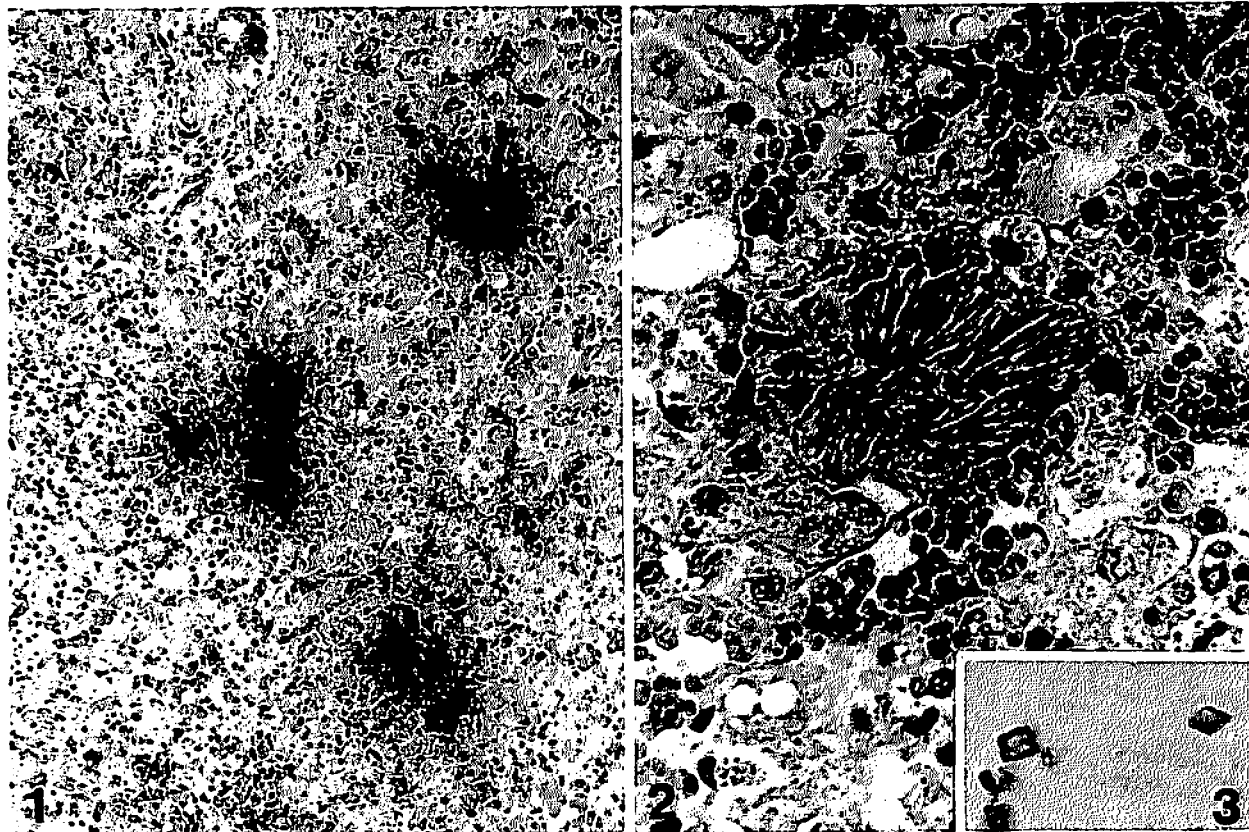


幼駒の肝臓

競走馬総合研究所病理研究室・日高地区共済出題 第25回獣医病理学研修会標本No.434



動物：ウマ(サラブレッド種)，雄，栗毛，13日齢，北海道日高産。

臨床的事項：昭和57年5月29日出生。生後暫くの間は特に異常な挙動を認めなかったが，漸次元気がなくなり，沈うつ状態を示すようになった。生後3日目臨床的に新生児黄疸症と診断され，以後種々加療（輸血，輸液等）されたが，良化することなく6月10日午前2時死亡。生後4日目及び7日目の血液検査では，重度の貧血と黄疸を示した。

主要剖検所見：1)全身性黄疸；全身の皮下織，漿膜，内部諸臓器及び体腔液の著しい黄色化。2)黄褐色塊状内容物を充満した大腸便秘。

肝臓の組織像：最も特徴的な所見は肝小葉内の黄色色素沈着であった（写真1，HE， $\times 121$ ）。色素には，パラフィン切片HE染色標本において概ね次の4タイプが識別された。A；ディッセ腔内，類洞内にしばしば見られる淡黄色の針状結晶物（写真2，HE， $\times 397$ ）。B；類洞内皮細胞内の淡黄色の微細顆粒。C；肝細胞内に見られるくすんだ帯黄褐色色素。D；肝細胞内の光沢を有した限界明瞭な微小黄褐色顆粒。

このA～Cは鉄反応，脂肪染色，抗酸菌染色，PAS反応に対して陰性を，グメリン反応に対して陽性を示したことから胆汁色素に属するものと考えられた。

また，Dは凍結切片無染色封入標本において，橙黄色の顆粒状あるいは菱形の結晶として観察された（写真3，

$\times 527$ ）。この結晶は脂溶性で，鉄反応陰性，グメリン反応陽性を示したことからヘマトイジン結晶とみなされた。

この他，類洞内皮細胞の活性化，赤血球貪食像，血鉄症，髓外造血像，肝細胞索の配列の著しい乱れ，肝細胞の変性・壊死及び消失並びに多核巨細胞化，小葉周辺性の細胆管増生が観察された。

なお抗馬グロブリン血清を用いたavidin-biotin-peroxidase complex(ABC)法による免疫染色は赤血球表面で陽性であった。

以上の所見は胆汁色素沈着の著しい黄疸肝で要約される変化であった。黄疸の発生には，赤血球貪食像，免疫染色及び凍結切片標本所見から免疫学的機転による溶血の関与が推察され，その原因として母子間の血液型不適合による新生児黄疸症が考えられた。また，ディッセ腔内及び類洞内にしばしば見られるA並びに類洞内皮細胞内のBの存在は，胆汁色素が毛細胆管から再び肝細胞に流入し，あるいは毛細胆管に排泄されることなく，肝細胞を逆流して類洞またはディッセ腔に流入していたことを示唆した。

診断：針状の胆汁色素沈着の著しい黄疸肝（ウマの新生児黄疸症としては経過が長く，色素沈着が著しかったことから，附議としてヒトの新生児及び乳児で見られるAtresia of the extrahepatic bile ductsの併発を疑う意見もあった。）